

# 魅せる！

## ようこそ長門峡へ

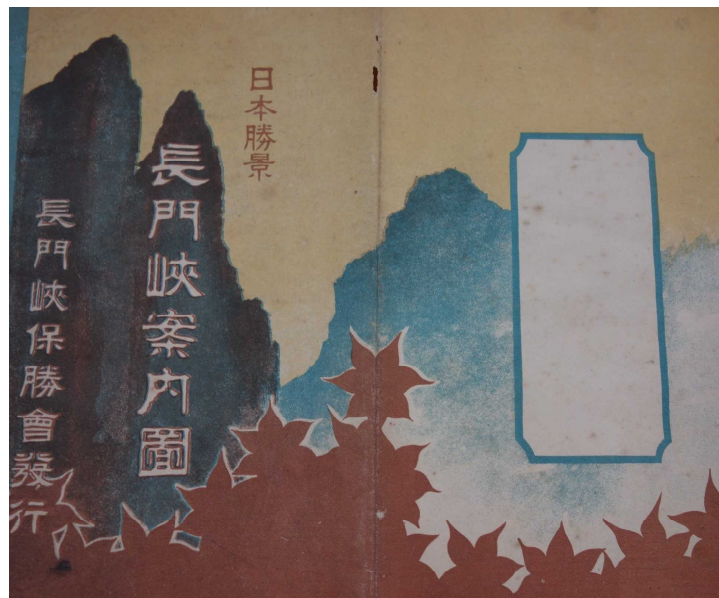
昭和初期、わが国はすさまじいばかりの観光旅行ブームを迎えたとされます。  
それは、江戸期の庶民の旅行ブームを想起させるような社会現象であったとも言われます。

大正デモクラシーという「はなやぎ」があったにはせよ、  
日露戦後の日本社会には、その底流に「停滞感」や「閉塞感」が漂っていました。

だからこそ、ささやかな娯楽が歓迎され、  
手の届きそうな非日常の世界への興味が人々の好奇心をくすぐり始めるようになりました。

大正・昭和初期は鉄道網が拡充された時期にもあたります。  
鉄路の響きは、地域の発展に向けてのファンファーレでした。

今月の月刊資料小展示では、長門峡の観光開発にまつわる多様な資料を紹介します。  
観光地としてのブランド確立に向けた地域戦略や情熱を読み取ってみたいと思います。



阿武川上流部の峡谷が「長門峡ちようもんきょう」と命名されたのは大正9年8月のこととされますが、  
今回の展示及び解説では、それ以前についても、便宜的に長門峡の呼称を用いました。

## 序章 巷のハナシ —知れわたるきっかけ—

### ▼明治41年

河北勘七（山口町出身の実業家、のちに山口町長、衆議院議員）らによる阿武川水力発電計画の現地踏査で 峡谷内の写真が撮影される。

### ▼大正元年8月16日

山口県教育会総会での山口高等商業学校英語教師エドワードガントレットの学術講演  
演題『秋吉瀧洞探検談』

阿武川上流部の溪流について、「天下無比！佳絶な景色！耶馬溪以上！」と激賞。

→明治41年の夏以降、避暑のために長門峡を訪れ、峡谷の探勝をくりかえしていた。

阿武川上流美の溪谷美が、世間に認知され、人々の耳目を惹きよせるきっかけになった、「長門峡メジャー化の序章」として位置づけることのできる二つの出来事です。

それまでの長門峡は、「篠生村報 第6号」（大正10年8月発行）〈波多放彩収集史料53〉収録の高島北海談話「長門峡探勝」〈大正9年8月15日付防長新聞掲載記事〉に「地勢の余りに険悪にして、樵者漁人の外は通行の者なく、此者等の眼には常に見慣たる景にて、別に之を世間に宣伝するの意なかりしに依りしならん」とあるように、世間に知られていない存在でした。

当時は、九州の耶馬溪が溪谷美の代名詞でした。山肌をえぐる激流、浸蝕によりかたちづけられた奇岩がおりなす国内各地の溪谷の景観美は、多くの場合「●●の耶馬溪」と称されていました。長門峡の場合も「長門耶馬溪」と呼ばれることがしばしばでしたが、ガントレットやその周辺の外国人教師は、峡谷を意味する英語「ゴージ」を用いて、「阿武川ゴージ」「御堂原ゴージ」と呼んでいたようです。

景勝地は、絵画に描かれ、詩歌に詠まれ、道中記や紀行文に認められ、それをきっかけとしてその存在が広く世に知れ渡ることがしばしばでした（長門峡にかかわった人物として、絵画では高島北海や兼重暗香、詩歌では花本聴秋〈俳人上田肇〉や高島九峰〈書家、高島北海の兄張輔〉、紀行文では評論家横山健堂の名前を挙げることができます）。

ガントレットは、将来の鉄道（現在の山口線）開通を見越して、溪谷の観光地化が可能であることを指摘しています。英国王立地学協会会員であり、「秋吉の瀧穴（秋芳洞）」をはじめとする美祢郡の鍾乳洞のPRにも大きな役割を果たしたガントレットの博識が長門峡にスポットライトを当てるきっかけを作ったのです。

## 魅せる！その1 メディアミックス—新聞社とのタイアップ—

▼大正6年6月26日27日28日 防長新聞記者の永見華北が長門峡を探勝。

▼大正6年7月1日から8日 防長新聞紙上に探勝記事「長門耶馬溪」連載される。

大正6年7月、防長新聞紙上で長門峡の「みどころ」を紹介する紀行文が連載されました。防長新聞記者が地元自治体や鉄道省からの依頼で現地を訪れた可能性が高いと思われます。つまり、観光地化に向けて、集客のために地元が選択した「メディア戦略」のひとつと考えられます。

永見華北（貞一）は、健筆家として知られ、のちに防長新聞の取締役を務めた人物です。大正5年、山口県庁舎竣工を記念して刊行された観光ガイドブック『山口県庁舎落成式記念山口案内誌』〈一般郷土史料B79〉の筆者です。交通網が未整備であった当時、「まだ見ぬ土地」を知りたいというひとびとの願望は、新聞記者の現地取材に基づいたルポルタージュによって満たされていました。永見は「周防アルプス」「日本海の孤島」「周防の多島海」などの現地踏査を実施、興味をそそる各地の

景観を、人情・風俗・伝説などを巧みに織り交ぜて新聞紙上に再現しています（新聞記者によるこうした情報伝達は「筆征」と呼ばれていました）。

次に掲げるのは、「篠生村報 第6号」や各種の長門峡案内書に紹介されている伝承の数々です。

▼三浦介元久▼御堂原▼多々良製錬所▼龍宮の音楽▼鐘淵▼経塚▼多々良の館跡▼三浦介元久龍宮へ行事附神軍之事▼渡川城跡▼画聖雪舟閑居の址▼龍宮淵の伝説▼暗淵の川餓鬼▼湯の瀬温泉の回忌▼龍宮の音楽▼波止場の址▼大藤の大藤▼矢櫃の古戦場▼唐の岩（塔内岩）の伝説▼長者淵の伝説▼杣木谷より大仏殿の用材を出す▼川上村義民の墓▼平家に関する伝説のくさぐさ

「たたら→赤鬼（製鉄）」「落人（敗者）」「敗戦と城跡（廃墟）」「東大寺再建（用材伐りだし）」「義民」「雪舟」、歴史にまとわれた謎めいたエピソードは各地でさまざまなかたちに姿を変えてはいるものの人々の関心を集める話題でした。こうしたエピソードの掘り起こしも観光地開発には不可欠な要素だったのです。新聞記者による「筆征」という名の情報収集が重宝されたことは言うまでもありません。

永見による大正6年6月の長門峡探勝は、津和野線（現在の山口線）の篠目延伸による利便性向上を視野に入れた集客戦略であったことは言うまでもありません。

連載開始前日の防長新聞紙上には、「謹告」として、

……津和野線山口篠目間開通にあたり、篠生村及び附近の勝地を社会に紹介する為、弊社記者永見貞一をして探勝旅行せしめ候処、岡村阿武郡長は特に此挙に声援を与えられ、川上村長を始め沿道の有志諸君は……

との新聞社からのコメントが掲載されています。

大正10年9月、整備を終えた長門峡探勝道を山根武亮将軍と高島北海画伯が踏査します。このときの様子は、高島北海の幼少時から知己であった文人熊野九郎（現地踏査に同行）が詩文とともに情緒豊かにまとめています（『長門峡探勝記』〈一般郷土史料B259〉）。

さらに、大正14年1月から4月にかけての防長新聞紙上には、博覧強記でその名をとどろかせていた評論家横山健堂（横山達三、萩出身）による100回にわたるコラム「長門峡と耶馬溪」が連載されました。前年末の自身の現地探勝に基づいたもので、防長新聞社主筆原田紀堂（原田豊次郎、元東京朝日新聞記者）に寄せた「たより」のかたちで連載。のちに、防長新聞社から『長門峡と耶馬溪』〈一般郷土史料B267・268、田村哲夫文庫1205、御園生翁甫文庫440〉として刊行されています。

## 魅せる！その2 色鮮やかに！—旅行案内書—

- ▼大正6年7月1日 津和野線篠目駅まで開通。
- ▼大正7年4月28日 津和野線三谷駅まで開通。

長門峡の北口にあたる御堂原は、篠目駅・三谷駅の中間に位置します。鉄道の延伸を契機に、長門峡を観光地として売り込む機運がいつそう盛り上がったことは言うまでもありません。

鉄道開通にあわせて、大正7年5月には河村鶴吉（当時の篠目村助役）が龍宮溪探勝会を結成（長門峡は地元では龍宮溪と呼ばれることもありました）。現地探勝案内所（案内人〈山岳ガイド〉が駐在、山轎〈やまかご〉も用意されていた）を開設したほか、知名度向上のために絵はがきを発行したとされます。

篠生村長口羽順蔵は、長門峡探勝の起点として、村内御堂原への鉄道駅設置を発案。阿武郡長岡

村勇二とともに、三田尻保線区・門司鉄道局への陳情を繰り返しました。誘致運動の成果として大正10年10月、ついに、鉄道大臣元田肇の現地視察を実現、大正11年4月に仮停車場開設（当面は観光シーズン〈4月から10月〉のみの開業、昭和3年7月に常設の駅に昇格）。こうして、長門峡は鉄道のネットワークに組み込まれることになり、多くの探勝者を受け入れることになったのです。

ちなみに、鉄道誘致は地域振興の切り札と目されていて、政治家も自らの出身地への鉄道誘致に躍起になっており、その様子は「我田引鉄」と揶揄されてもいました。「港湾」「高速道路網」「新幹線」「空港」「防災高規格道路」。その姿を変えつつも、交通インフラの整備は地域振興策の切り札として、今日まで連綿と受け継がれています。

鉄道網の整備拡充とあわせて、利用促進と集客確保は並立する大きな課題でした。明治末年から鉄道省では鉄道の延伸に合わせて沿線の名所案内として『鉄道旅行案内』を刊行。集客の確保増大を目指しました。発刊以来、版を重ねて来たこの案内書のグレードアップのために白羽の矢が立ったのが、「大正の広重」としてその名を知られるようになっていた鳥瞰図絵師吉田初三郎でした。大正10年版「鉄道旅行案内」は発刊後一年半で40数版を重ねる大ベストセラーとなりました。鉄道開通五十周年記念事業として刊行されたもので、装丁と挿絵を依頼された初三郎は取材のために全国を旅行したとされます。これをきっかけに、初三郎のもとには、全国各地の都市・鉄道・ホテルから名所鳥瞰図の作成依頼が殺到することになります（展示しているのは「鉄道旅行案内」大正13年版の同年11月20日発行第10版〈山口市山根家文書52〉）。

長門峡は、大正13年版「鉄道旅行案内」に初登場、錦帯橋とともに山陽本線沿線の名所として紹介されています。長門峡の光景が見開きで印刷されていますが、そこに見られるのは真景風の写実的な長門峡の姿であり、愉快で軽快な初三郎の鳥瞰図の描写とは異なったテイストのものです（画風としては、重要文化財山口県旧県庁舎の正庁会議室に掲げられた初三郎の肉筆画「山口県全図」〈昭和22年〉を彷彿とさせます。）。

吉田初三郎は、美祢線の萩駅延伸（厚狭－吉則－正明市－萩）を目前に控えた大正13年、萩町と長門峡管理組合からの依頼で長門峡を踏査（このとき同行したのが弟子の前田虹映〈玖珂郡新庄村出身〉）、その見分に基づいて、大正14年3月に「長門峡鳥瞰図」が発行されています（長門峡管理組合発行、国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能、県立山口図書館に所蔵あり〈Y273/F5〉）。なお、同様に鉄道の萩駅延伸を記念して発行された「萩名所図会－萩を中心とせる附近名所図絵」〈上関町佐倉家48〉や「史蹟詳説萩案内 附長門峡外三大奇勝」〈一般郷土史料127・133〉にも初三郎の描いた長門峡を見ることができます。初三郎の作品は、人々を現地に誘う魅力的な名所図絵だったのです。

写真、地図（案内図）、色彩豊かなスケッチを組み合わせて長門峡を紹介した旅行案内・観光案内のパンフレットなどを紹介しておきます。

- 「日本勝景 長門峡案内図」大正10年、長門峡保勝会発行〈土山家文書609〉
- 「伝説を主としたる 長門峡案内記」大正11年、長門峡保勝会篠生村事務所発行〈周防大島町三蒲佐川家1497、一般郷土史料B269〉
- 「名勝長門峡案内 附佐々連鍾乳洞」大正13年、藤井写真館発行〈一般郷土史料B265、一般郷土史料B266〉
- 「長門峡と鍾乳洞」大正14年、門司鉄道局発行〈一般郷土史料B270〉
- 「長門峡と秋芳洞」昭和4年、門司鉄道局発行〈一般郷土史料B274〉
- 「鍾乳洞案内」昭和4年、門司鉄道局発行〈一般郷土史料B245〉
- 「長門峡 第14号」昭和6年、長門峡精舎会発行〈滝口明城169〉
- 「遊覧案内 長門峡と秋芳洞」昭和7年、小郡駅発行〈一般郷土史料B271〉
- 「溪谷美の極致 長門峡」昭和7年か、萩市役所内長門峡管理組合役場発行〈一般郷土史料B118、一般郷土史料B277〉
- 「天下の奇勝 長門峡案内」昭和14年、田中洗心館発行〈一般郷土史料B273〉

- 「名勝長門峡案内」昭和14年か、山口県発行〈一般郷土史料B272〉
- 「名勝長門峡案内」昭和15年、山口県発行〈一般郷土史料B291〉

## 魅せる！その3 「スゴイ」 ―著名人による賞賛―

▼大正9年7月17日18日

岡村阿武郡長・福田茂穂阿武郡技手による長門峡探勝。

→翌月の山根武亮将軍と高島北海画伯の現地探勝に向けての下見。

▼大正9年8月8日9日10日

山根将軍・高島画伯・岡村郡長・福田技手・原田写真師による長門峡探勝。

「長門峡」と命名される。

鉄道開通による地元の盛り上がりのさなか、阿武郡長岡村勇二も長門峡の観光地化のために立ち上がります。

明治20年代から県吏員としてその名を確認できる岡村は、日露戦後の地方改良関連施策遂行の論客として県庁内務部で活躍、大正4年の阿武郡長就任後、地域振興にその手腕を発揮します。三戸雅乙らによる更新会の自由教育革新運動を側面から支えたのも岡村でした。地方改良には、国力充実という大目標があったのですが、今日風に言えば、地域振興や地方創成などのニュアンスも込められていました。

岡村は篠目村御堂原への鉄道駅設置に向けて、口羽篠生村長とともに東奔西走したほか、萩出身の陸軍中将男爵（貴族院議員）山根武亮、同じく萩出身で、山根将軍とは明倫館以来の知己であり、日本画家高島北海の現地招聘を計画します。両者の現地探訪により賞揚を得る、つまりは両者のネームバリューを利用して長門峡の溪谷美を「広く天下に知らしめること」により、長門峡の観光地としてのブランド化を成し遂げようという戦略でした。岡村が描いた長門峡開発のビジョンは、「篠生村報第6号」の「長門峡に就て＝篠生人士に望む」と題された論説に明らかです。

山根武亮・高島北海両名の現地招聘を目前に控えた大正9年7月、岡村郡長は峡谷の現地予察を済ませています。そして迎えた大正9年8月、いよいよ両者による現地探勝が実現。写真師原田耕雲のほか、嶮岨な岩肌の道なき道を踏破する70歳を超える高齢の2人を助けるべく、一行には5名の補助員（ガイド）が加わっていました。探勝を終えた北海は「峡谷の美景としては日本一」と絶賛、雄大豪壮な風景を「危岬・峭壁・激流・飛瀑・碧潭の千変万化」と表現して、「只恍惚」「人を麻痺せしむ」の言葉を残しています。画家であり林学・地質学の泰斗でもあった高島北海を驚嘆させる自然のおりなす造形美がそこには溢れていたのです。

出身地からの懇請であったことはもちろんですが、この数年前に朝鮮金剛山の観光資源掘り下げにも関係していたことが、高島北海を長門峡へと向かわせた一因と考えられます。

高島北海による長門峡に関する学術的な評価は、「篠生村報 第6号」に収録されている「長門峡探勝記」（大正9年8月15日「防長新聞」掲載の高島北海の談話を北海自らが校閲したもの）や「長門峡の五大特色并に丁字川」（東京において高島北海が叙述したもの／大正9年10月13日「防長新聞」掲載、のちに長門峡保勝会により冊子体で発行された（〈一般郷土史料B263・滝口明城256））ほか、「長門峡案内図」（土山家文書609）にも印刷されています）で知ることができます。

前者には、この溪谷が日本一の峡谷美を有すること、そして「長門峡」と命名したことが述べられています。さらに、後者には、長門峡の地質学的な五大特色として、「①空気の変化②石脈の横断③水中の巨岩及石色石理の美④瀑布及淵潭⑤天然喬木林」が掲げられています。この言説は、長門峡の学術的な評価を裏付けるマスターピースとして頻繁に利用されることとなります。

このほかにも地質学者神保小虎（日本地質学会初代会長、東京帝国大学教授、美祢郡の鍾乳洞〈秋

芳洞・大正洞・景清洞・中尾洞)の文化財指定に関与、のち佐々連洞の観光開発を支援)、さらには、当時の国の文化財保護行政の第一人者であり、大正8年の史蹟名勝天然紀念物保存法制定にも深くかかわった文部官僚国府犀東などの現地探勝を実現。峡谷の絶景について賛辞を得ることに成功しています。

大正12年8月には山口で東京地学協会(会長は神保小虎)主催の学術講演会が開かれ、その後、現地の学術視察が実施されました。このとき、「長門峡に就いて」と題する講演を行ったのは、防長新聞社の副社長であり主筆であった原田紀堂(豊次郎)でした。防長新聞社と長門峡の深い関係を読み取ることができます(講演要旨は「長門峡に就いて(東京地学協会主催講演会に於ける講演要旨)」として冊子にまとめられています〔一般郷土史料B264・田村哲夫1201・御園生翁甫43〕。

このように地域の有力者や学者による学術的な見識に裏付けられた長門峡絶賛のコメントが、長門峡の知名度向上に確実に大きく貢献したのです。

## 魅せる！その4 「保勝会」の結成 ―組織による演出―

大正9年8月12日、長門峡探勝を終えた山根武亮将軍と高島北海画伯が逗留していた萩富田旅館に、岡村郡長・福田阿武郡技手・小倉萩町長・佐々木生雲村長・森川上村長・口羽篠生村長が集合、峡谷の名称を「長門峡」とすることが決定、さらに「長門峡を広く天下に紹介し探勝者の便利を図り且勝地保護」のためとして下記事項が取り決められました。

- ①長門峡保勝会を設立する。探勝道路の新設・維持、景勝地保護、来訪者の便宜を図る。
- ②高島北海の寄附により、阿武川左岸に延長2里半幅34尺の探勝道を新設整備する。
- ③資金準備のために高島北海の画会(即売会)を実施する。  
北海の描いた長門峡の真景100枚を一枚100円で販売。その収益を保勝会に寄附する。
- ④今回の探勝で撮影した写真に高島北海氏による説明を附して、長門峡の概説書を刊行する。

8月13日、阿武郡役所での関係者の会合を経て長門峡保勝会が成立します。保勝会の会則は、「篠生村報」(第6号)に収録されています。総裁に山口県知事を推戴、会長に岡村阿武郡長、名誉顧問に高島北海が就任、事務局は阿武郡役所内におかれました。

明治以降、観光の促進、観光資源の保護のために、日光や京都をはじめ、全国各地の景勝地で保勝会が組織されるようになっていました(県内でも、錦帯橋・秋吉瀧穴・青海島・石柱溪・須佐湾で結成されました。最も遅い例としては、昭和15年に長門鉄道(小月―西市)沿線での保勝会結成事例を確認できます)。

長門峡保勝会は、大正12年の長門峡の国による名勝指定ののちには萩町外七箇村長門峡管理組合に改称されています〔「萩町外七箇村長門峡管理組合規約」(波多放彩収集史料153)〕。その後、昭和8年、長門峡の管理は山口県に移管されます。

長門峡保勝会の結成直後、8月17日、阿武郡教育会主催で萩高等女学校で開かれた「萩大講演会」では、高島北海と岡村郡長が長門峡現地探勝について報告、さらに、長門峡保勝会の設立と同会への協力についての要請がなされました。この講演会の講師には、横山健堂も名前を連ねています。当時の萩町にとっての喫緊の課題は、萩小郡間の鉄道敷設でした。世論喚起の決起集会の枢要事項として長門峡保勝会の結成報告や同会への協力要請が議題としてラインナップされていることも、阿武郡における「長門峡開発」の位置づけを象徴しています。さらに、8月30日開催の阿武郡内町村長集會でも、岡村郡長が長門峡保勝会会員募集(寄附金募集)の呼びかけを行っています。

## 魅せる！その5 探勝道の整備

保勝会主導でさっそく実行に移されたのが、長門峡探勝者の利便向上を図るための探勝道（遊歩道）の整備でした。

大正9年の長門峡探勝時に現地の光景を目の当たりにした高島北海が描いた写生画を販売（百幅画会）、その収益を高島北海が保勝会に寄附、それを元手に探勝道路を整備するというプランでした。

探勝道は、大正10年1月起工、6月完工、「篠生村報 第4号」（大正10年7月10日発行）に次のような告知が掲載されています。

長門峡道路が開通致しました。此の際誰方へも御探勝を御勧め致しますと同時に、親戚知友の御方々に此の世界的大風景を御紹介下さる様希望致します

探勝道のお披露目にあわせて、大正10年7月30日の「防長新聞」は長門峡特集（「長門峡探勝者のための案内記」）を発行しています。

▽峡谷美＝長門峡（紀堂楽人〈原田紀堂〉）▽長門峡の五大特色（北海画伯）  
▽共楽会の組織（国司少将〈国司精造〉）▽長門峡に就て（岡村郡長）  
▽阿武川の峡谷（英文、モンクリーフ）▽長門峡の探勝をなさる方々へ（むらさき生）  
▽長門峡を覗いて（洋画家菊地五郎）▽長門峡探勝（石村香村）▽長門峡の伝説二一件  
▽篠目駅からの名勝地里程表▽長門峡の鮎▽共楽会の工事其他▽  
【写真】御堂原に於ける丁字川の合流点・野戸呂川尻の雪舟橋・湯の瀬新浴場・栃崎尻  
（いずれも原田写真師撮影）▽写真師の観たる長門峡（原田耕作）

この時点での長門峡に関する情報の集大成と言える紙面です。前年8月の、山根武亮・高島北海の長門峡探勝に同行した原田耕雲撮影の写真や、文人として活躍していた石川香村の紀行文が、紙面を彩り、人々を長門峡に誘います。

北海からの寄附金は探勝道沿いの植栽にも充てられました。保勝会では、埼玉県北足立郡安行の苗木商に桜や楓を注文。桜や紅葉が溪谷探勝に花を添えたのです。

長門峡開発への多大な貢献により、大正13年10月、高島北海は紺綬褒章を授与されています。そして、その他の県内の名勝指定（石柱溪〈大正14年〉、青海島〈大正15年〉、須佐湾〈昭和3年〉）にも大きな足跡を残しています。

北海による「義挙」に呼応したのが、京都の俳壇で一世を風靡していた花本聰秋（上田肇）でした。大正10年8月に長門峡を探勝。その景趣を激賞したほか、高島北海による探勝道開設資金寄附に感銘を受け、自らも句会を開いてその収益を保勝会に寄附しています。この寄附金は長門峡内金郷溪への探勝の利便性向上を図る目的で聰秋橋架橋（大正11年5月竣成）の資金に充てられました。

なお、探勝道路新設や沿道の休憩設備の整備には、長門峡保勝会以外にも、山口在住者を中心に大正10年5月に結成された長門峡共楽会が資金面での支援にあたります。共楽会は一步進んで、長門峡内の湯治場湯の瀬における温泉整備や旅館経営（萬碧楼）にも乗りだします。長門峡の観光振興には宿泊客の増加という意味から、山口からも熱視線が注がれていたのです。また、萩方面の有志により湯の瀬には旅館が整備されます（長峡館や澄心閣）。長門峡探勝客を「阿武川下り」に誘導して、萩地域での観光需要増大を期待した動きでした。

当時の山口県には「天下の三大奇勝」というとらえ方が一般的でした。長門峡の峡谷美、青海島の海岸美、秋吉瀧穴の洞窟美を三点セットとして回遊させるという観光ビジョンが強く意識されていたことを、関連資料の端々から読み取ることができます。

## 魅せる！その6 ビジュアル戦略 写真や映像を利用した集客戦略

長門峡保勝会結成後の大正10年12月、長門峡の佳景を紹介した写真帖が発行されます〔「長門三大奇勝之一 長門峡写真帖」〕〔田中義一文書1461〕・〔田村哲夫文書1204〕。印刷製本は東京の株式会社審美書院。使われた写真は原田耕雲（原田耕作）により撮影されたものと思われます。

原田耕雲は山口湯田で「エッチ写真館」を経営。その広告には、謳い文句として「長門峡最初の写真撮影」と掲げられています〔「長門峡案内記 伝説を主としたる」大正11年11月、長門峡保勝会篠生村事務所発行〔周防大島町佐川家文書1497／一般郷土史料B269〕〕。先に紹介した阿武川水力発電の事前踏査（明治41年）に同行した写真師でもありました（大正10年7月30日付「防長新聞」の長門峡特集の「写真師の観たる長門峡」原田耕作〈おそらく原田耕雲本人〉の寄稿文に記されている）。

また、大正元年8月28日付「防長新聞」紙上に山口湯田エッチ写真館原版寄贈として「生雲村の瀑布」の写真が掲載されており、その説明には「・・・・阿武川水電は実に此水勢を利用して・・・・発電所を設けんとす」とあります。この記事も明治41年に原田写真師が電源開発の現地踏査に同行したことを裏付けてくれます。ちなみにこの写真が掲載されたのは、先に紹介したガントレットによる山口県教育会総会での記念講演会の講演録連載記事です。原田耕雲は、長門峡の写真撮影のパイオニアだったのです。山根將軍と高島画伯による最初の長門峡探勝以降、原田耕雲は、高島による県内の景勝地探訪（青海島・越ヶ浜・美祢郡の鍾乳洞）には必ず随行しています。

写真をプリントした旅行案内書やパンフレットの発行に加えて、この頃は、映像フィルムが宣伝に用いられ始められる時期にもあたります。長門峡は阿武川下流の萩町にとっても貴重な観光資源でした。大正10年には、萩出身の実業家賀田金三郎（台湾銀行・台湾製糖を経営）の資金援助により長門峡の活動写真が製作されています。昭和4年にも門司鉄道局が高島北海監修により青海島と長門峡の活動写真を撮影しています。

### まとめ

長門峡の観光開発のあゆみ、売り出しのいくつかの手法について振り返ってみました。

長門峡は観光地としてその名を知られると同時に、国の名勝指定により、国民の財産として、学術的にも評価されることになりました。県内にあっては、その後、石柱溪・青海島（ともに大正15年国名勝指定）、さらには須佐湾（昭和3年国名勝指定）の観光開発や学術的な評価に関しても、長門峡に向けられた手法が援用されました。長門峡の知名度アップに高島北海が大きな役割を果たしたことは紛れもない事実ですが、地元の素材を演出する「魅せる」工夫の数々には、実にたくさんの人物がかかわっていたことも紹介してみました。

情報過多がもたらしたさまざまな飽和状態の中にある今日、「そんなことをしても結果はわかりきっている・・・・」というかわききった結論を安易に導き出してしまいがちですが、当時の資料に見え隠れするひたむきな姿勢、ちょっとした工夫や熱意こそが地域振興の原動力であることを再認識できるように思います。ほんの少し前の出来事が凝縮された記録なのですが、観光開発に関連した資料は、歴史に学ぶことの大きな意味合いを物語ってくれているように思われます。